

論文審査及び学力の確認結果報告書

論文博士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座		
学籍番号	15GR107	氏名	高橋 憲人
審査委員	主査	今田 匡彦	
	副査	杉山 祐子	
	副査	山田 巖子	

(論文題目)

芸術教育のエコロジカルアプローチ：身ぶり、肌理、コレスポンダスに着目した地域芸術実践のデザイン

(論文審査の要旨)

近年、参加型アート (Participatory Art) における日本独自の形態として、「アート・プロジェクトが注目されている。アート・プロジェクトはその特徴として「共創的 (アーティストと参加者が共に創りあげる)」であることがあげられる。しかし、一般市民がそのプロセスに参加しているとはいえ、その大まかな枠組みのデザインは、ファシリテーターとしてのアーティストが行う場合がほとんどであり、多くがフェスティバル型とでもいべき非日常のイベントと化している。本研究では、既存のアート・プロジェクトに対し、一般市民の日常の (観察すること) と (つくること) を基盤とした、インクルーシブな芸術実践をデザインすることを目的とする。その際に重要となるのが、ファシリテーター側の外部の視線ではなく、生活者側の目線で知覚された環境である。ある特定の環境をとらえるのに都市デザインや、パブリックアート等の文脈で使われる語は「ランドスケープ」であるが、この語は一般的に「対象から一定の距離を保った眺望」といったニュアンスがある。しかし、その起源を探ると、「ランドスケープ」が、生活者の身ぶりや環境の流動とが織り成す場を指すことばであったことが分かる。このような、生活者との動的な関係を結ぶ環境を捉えるエコロジカルなアプローチのために、J.J. ギブソンの生態学的知覚論と、それを発展させたティム・インゴルドのリネアロジーを参照した。

また、(つくること) を、環境の流動のなかでの素材とのコレスポンダンスと考えるインゴルドの芸術論、芸術を身ぶりあるいはその痕跡と捉えるロラン・バルトの芸術批評を参照し、既存の環境芸術やサウンドアート、とくにドローイングアーティスト鈴木ヒラクの実践を分析することで、芸術実践における (観察すること) と (つくること) の相即を見出すことができる。さらに、R.M. シェーファーのサウンドスケープ理論、またそれに基づく教育実践サウンド・エデュケーションを、(聴くこと) と (音をつくること) の相即に焦点化し考察することで、日常の知覚における (観ること) と (つくること) の相即、そしてそれを基盤とした視覚芸術の実践を導き出すことができる。そうして導き出された、環境のテクスチャに着目した芸術ワークショップを弘前市内で実践した。とくに、弘前大学教養教育の授業「アート・プロジェクト入門」のなかで、断続的に実施したワークショップでの、コメントペーパー、また参加者自らがデザインした芸術実践を分析することで、参加者たちが、自から (観察すること) と (つくること) の相即に気づき、その発見が日常生活にも広がっていくプロセスが観察できた。

(学力の確認結果の要旨) 学力の確認結果日：2019 年2月2日

※弘前大学大学院地域社会研究科における学位論文審査方法等に関する申合せより

今日、本山、山田の3名び口頭質問を行った。審査者から論文の目的と結果についての質問があり、執筆者から詳細にわたる説明が成された。T. 副査2名からインゴルドの芸術論とアート・プロジェクトの実践と結び付いた秀作とありコメントがあった。また論文の構成について修正の余地があるとの指摘があった。以上を踏まえ、主査、副査全員一致で、博士論文に相応しい内容であると判断し、結果は合格。